

# 茨大聞き書き隊Notes

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 4年 菊地 ほのか

## 連携先

たすけあいセンター「Juntos」

ン学科 1年)

松江 まお (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

ア リ マ (人文学部 研究生)

## 顧問教員

石島 恵美子 (教育学部・准教授)

## 参加者

菊地ほのか (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)

大枝 俊貴 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

菊地 雅代 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

袖山 良美 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

外間 花怜 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

飯塚子都香 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

岩崎 彩 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

川原涼太郎 (工学部機械工学科 2年)

田島 彩花 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

山口紗奈子 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

大村みるほ (教育学部情報文化課程 1年)

鬼澤 麻美 (人文学部社会科学科 1年)

坂爪 礼衣 (人文学部社会科学科 1年)

鈴木 真由 (人文学部社会科学科 1年)

倉持 ゆり (人文学部人文コミュニケーション学科 1年)

## プロジェクトの概要

### ●立ち上げの背景

2015年9月の関東・東北豪雨による水害で本学のある茨城県も大きな被害を受けた。

災害直後からこれまで、ボランティア等を通して被災した住民と接し、そこで耳にした水害の体験や教訓を広く伝えていきたい考えた学生を中心に2016年4月に立ち上げたのが本プロジェクトである。

また、水害から半年が経過して、「忘れられてしまいそうで悲しい」という住民もいた。我々が直接足を運び、話を聞いたり交流したりすることで、その不安も少なからず和らげられるのでは、と考えた。

### ●目的と方法

本プロジェクトの目的は、①水害を経験した人々から体験や教訓を聞いて冊子にまとめることと、②冊子やその内容を防災に活用すること、③地域の人々と交流することである。特に東日本大震災以降、いつ起こるかかわらない次の災害に備えるために災害の教訓を残すことの意義が認められている。

冊子の作成にあたって「聞き書き」という方法をとった。聞き書きは、一方的な「語り」とは異なり聞き手の質問に話し手が答え

る形で行い、聞き手も話すことで相手の言葉を引き出すという双方向的なやりとりから生まれる。我々は「災害当時の行動」、「今日までの暮らし」、「誰かに伝えたいこと、教訓」の3つの質問を軸に、その場に応じてほかの質問を加えて行った。

## プロジェクトの成果報告

### ●活動の主な流れ

4月	結成
5月	聞き書きに向けての準備
6～7月	聞き書き
8月	聞き書き、防災教育の準備
9月	聞き書き、防災教育に参加
10月	聞き書き、冊子の編集
11～1月	冊子の編集
2月	冊子完成
3月 (予定)	冊子の配布・設置、常総市での報告会に参加

### ●聞き書きについて

聞き書きは豪雨で大きな被害を受けた常総市を中心に行った。そのため聞き書きを実施する前に質問をよく検討しメンバー同士で練習をした。また水害や防災についての勉強会やNPOと住民の交流会・ワークショップにも参加した。

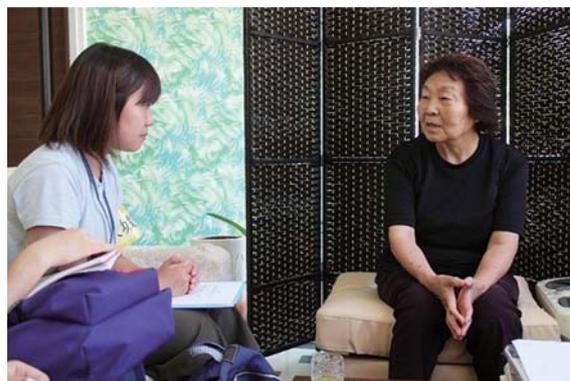


参加したワークショップでの様子

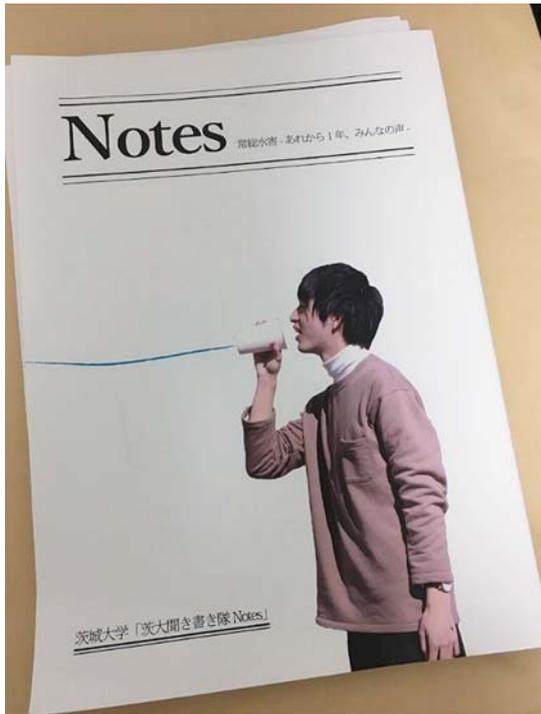
話し手は被災した人に限らずボランティア等を通して水害を経験した人など幅広く想定し、性別や年齢、職業や被害状況などに偏りが出ないように努めた。当初は連携先に協力いただきながら話し手を探していたが、対象の偏りをなくすため、また少しでも地域との交流を深めるために、現地を歩いたり地域のイベントに参加したりして出会った人に聞き書きへの協力を依頼していった。

聞き書きを通して、協力いただいた方々からは「話を聞きに来てくれるのがうれしい」、「意義のある活動だからしっかり行ってほしい」といった声をいただいた。

### 聞き書きの様子



冊子の編集にあたっては、まず聞き書きの内容をすべて文字に起こし、次に不要な部分の削除や話の順番の入れ替えなどをして文章を整えた。その後メンバー間で校正を行ったものを話し手に確認してもらい、原稿が完成した。文章はすべて話し手の言葉のみでまとめ、読者がリアルに感じられるようにした。また、表紙や誌面のデザインは、水害を経験していない人にも興味をもってもらえるよう意識した。



ロスロード」の問題作成など)の運営を行った。

我々が派遣された学校の先生方からは、「子供たちに寄り添う姿に感激した」、「子供たちのレベルをうまく考えていた」、「子供たちが自分で考え判断することができた」などと言っていただいた。我々にとっても、これからの地域の防災を担っていく子供たちと防災について考えることができた大変貴重な機会であった。参加した学生からは「自分も防災について学べた」、「継続的に行っていくべき」という感想や意見が出た。



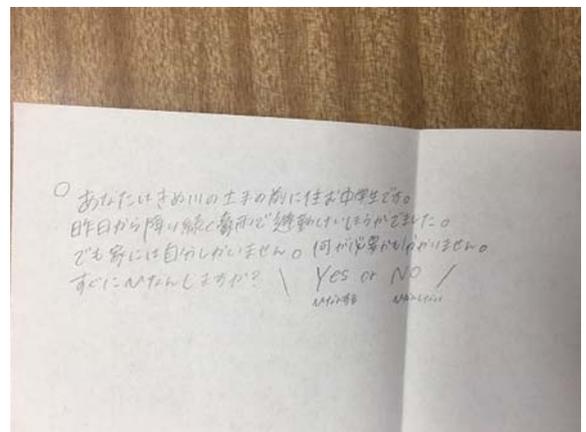
完成した冊子



「クロスロード」進行の様子

### ●防災教育への参加

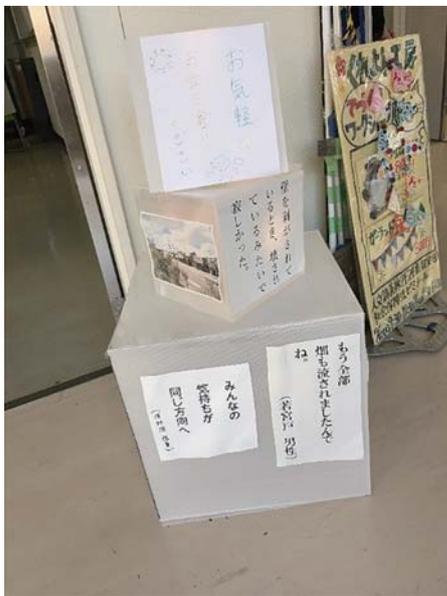
聞き書きの内容の活用ということで、9月に常総市の小中学校で一斉に行われた防災教育に参加した。その際、本プロジェクトのメンバー以外の学生6名にも協力してもらった。小中学校の先生方と連携して聞き書きの内容をもとに防災ゲーム「クロスロード」の問題を作成し、当日は学生1～3人組で各学校に行きゲームの進行やワークショップ（「ク



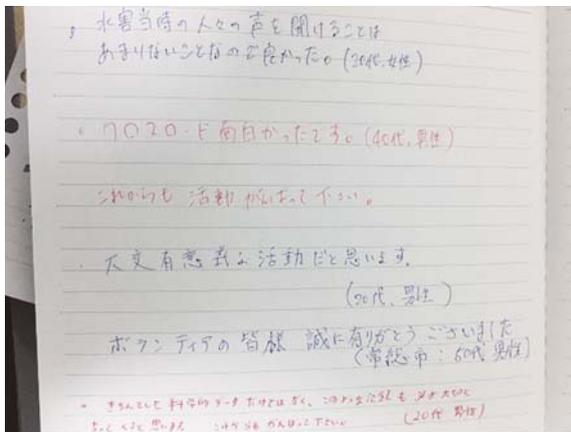
ワークショップで中学生が考えた問題

●活動の紹介

活動や聞き書きの内容を広めるため、複数のイベントで発表や展示を行った。大きなものでは本学の大学祭「茨苑祭」が挙げられる。関東・東北豪雨では大きな被害をうけなかった水戸で行うということで、なるべく多くに人の興味を引き付けられるように、ポスター展示だけでなく箱と照明を使った展示や「クロスロード」の体験を行った。2日間で100人以上に立ち寄っていただき、「水害当時の人々の声をきけてよかった」、「このような記録が必ず大切になるだろう」といった感想をいただいた。



箱に聞き書きの内容を貼った展示



茨苑祭でいただいた感想

常総市では9月の「復興祈念式典・シンポジウム」で活動の紹介をさせていただいた。

●活動の紹介：メディア

私たちの活動は、新聞やテレビ、雑誌に取り上げていただいた。その一部をここに掲載する。



東京新聞 2016年10月4日付 24面



旺文社「螢雪時代」2016年10月号より